令和５年度第１回瑞浪市図書館協議会 会議録

■日　時：令和５年１１月２日（木）　１４時００分 ～１５時３５分

■場　所：市民図書館　１階　研修室

■出席者（名簿順・敬称略）
《委　員》井上 典子、岩島 哲也、岩島 留美子、小栗 茂、湯原 定雄、永江 美年子、横地 玲子
《事務局》指定管理者（特定非営利活動法人こまどり会）：安藤 昇（瑞浪市図書館館長）、
今井ほのか（図書館司書）
社会教育課：奥谷 ひとみ（課長）、山路 雅子（課長補佐）、細田 達也（主事）

■欠席者：大内 貴志

■内容

１　開会
（会長あいさつ）皆さんこんにちは。本協議会では、委員の皆さんが率直な意見を述べることで少しでも図書館が市民にとって使いやすい施設になればと思う。本日はよろしくお願いしたい。

２　議題

（１）各委員の本年度の活動状況について

委　員：読み聞かせボランティアを行っている。７月に２回、読み聞かせ講座を受講した。講義では、本の選び方、人間に合わせた読み聞かせの方法、なぜ本が必要であるか、読み聞かせが大事であるか等について学んだ。本の読み聞かせの主役は聞き手と本であること、大げさに抑揚をつけて読む必要はないこと等、非常に勉強になった。とても有意義な講座であり、今後も開催していただきたい。

委　員：社会教育委員としてコミュニティスクールについて勉強している。これは地域と学校と子どもたちがよりよく結びついて成長していき、地域ぐるみで子どもを育てていくという活動である。自分たちが行っている活動が世間にどれだけ伝わっているのか懸念しつつ、これから子どもたちがどう生きていくか、地域で自分たちができることは何かについて、各地域だけでなく瑞浪全域で考えていこうと勉強している。意見は言えるが、行動に移すことは難しい。自分から進んで実行に移すことができなくても補助することはできるので、何か頼まれることがあれば、率先して動こうと思っている。
　ブックスタートでお母さんたちに渡している絵本はどのように選ばれているのか興味がある。読み聞かせで体験する感情のゆさぶり、生の声を親も子も楽しんでほしい。

委　員：当公民館では、徐々にコロナ禍前の状態に近づいてきたと感じる。本日、午前中に中学校の合唱発表会があった。全生徒、保護者、地域の人も入っていただいて素敵な時間であった。文化祭では、市民図書館にリサイクル本市と読み聞かせを行っていただく。とてもいい空間になると思うのでよろしくお願いしたい。
　市民図書館に入ってすぐのところに展示コーナーがある。今は麦わらを使った細工物が展示してあるが、本に親しむ場所に一味違った空間があるのはいいことだと感じる。図書館へ行ってみようと思うきっかけづくりにもなっていると思うし、そこから創作や図書につながる等、いろいろと含みを持った空間だと思うので、今後もぜひ工夫していただきたい。

委　員：幼児園と市民図書館とのつながりはあまりない状況である。幼児園での読み聞かせは地域の方が行っている。子どもたちは読み聞かせをとても楽しみにしており、言葉の獲得や感性を豊かにしていく観点からも非常に大切なことだと思う。

委　員：先程、市民図書館で職場体験をしている学生の様子を見た。緊張しながらも一生懸命お客さんの対応をしていた。図書館に対する興味を大事にし、職場体験で獲得した価値をはっきりさせながら今後につなげていけたらいいと思う。

学校図書館の司書の話によると、予算の兼ね合いもあり、なかなか生徒の希望に沿った本を購入できていない状況だという。市民図書館に生徒が希望している本があるか確認し、その本があれば市民図書館に足を運ぶよう働きかけることもできるのではないかと思った。

読書離れについて、家庭での読書時間は極めて少ない。学校の対策として、週２回朝読書の時間を設けている。その中で自分の読みたい本、興味のある本を見つけて読書の幅を広げていってくれたらと思う。まだ結果として現れていない部分もあるため、継続実施と啓発の仕方を考えていく必要がある。

委　員：高校図書館と市民図書館とが連携することは少ないが、本校の写真部が展示で大変お世話になった。高校生は特に読書離れが加速する年頃なので、イベントや展示の企画を工夫し、まずは気軽に来館して本に触れてもらうことに力を入れている。そうすることが、いずれ公共図書館や地域への還元につながるといいと思う。

最近の傾向として、小論文、面接、グループディスカッション等、大学の受験方式が多様化している。その関係で時事問題、社会問題等を扱うことが増えてきたので、高校図書館としてもそれに関連する資料の充実を図っている。

委　員：当公民館では、紙芝居を題材にした読み聞かせ講座を企画し、市民図書館職員に講師をお願いした。６名が受講した。何十年にもわたり文化祭で手作りの紙芝居をしていた方が亡くなり、それが途絶えてしまったため、もう一度復活させたいと考え企画したものである。その方の紙芝居は、地域の出来事を物語にした作品である。文化祭でその紙芝居をスクリーンに映して読み聞かせを発表し、大変好評であった。このような形で地区公民館と市民図書館がつながることができ、大変良かったと思う。

（２）令和６年度市民図書館管理運営業務計画（案）について

事務局：説明の前に、先程の委員からの質問に回答する。ブックスタートの選書については、ブックスタート活動を推進するＮＰＯ法人が何種類か本をピックアップしており、その中から３、４種類選書し購入している。その購入した本の中から２種類を皆さんに提供している。

本日、中学校の生徒が市民図書館で職場体験を行った。今年度は高校３校、中学校は市外を含め４校から来ている。高校生から、ぜひボランティアに来たいという声もいただいた。

〈事務局より、資料に基づき説明〉

委　員：ＳＮＳを活用した「ぬいぐるみお泊り会」は他市の図書館でも開催されているか。

事務局：以前、他市の図書館より話を聞いたことがある。ぬいぐるみが選んでくれた本ということが子どもたちをワクワクさせ、好評を得ているとのこと。また、母親達もＳＮＳを使っており、アクセスしやすいとの話もある。

委　員：現地視察した図書館はどのような施設であったか。

事務局：直近では、２か所の図書館を視察した。一つは平成 27 年にリニューアルオープンした施設で、良い面と課題となる面がメディアで話題となった図書館である。行ってみるといい図書館だと感じた。書店のように本を手に取りやすく、会話が弾むような空間も存在し、静かな空間とはしっかり分けられている点が良いと感じた。１階にはカフェ店舗が入っている他、通常の書店としても利用ができるため、利用者にとって使いやすい施設であると感じた。ただ、独自の図書分類で運営しているため、図書館司書としては慣れるまで大変だろうと思う。

もう一か所は、今年リニューアルオープンした図書館で、こちらは駅からアクセスしやすい場所にある。専門書を中心に置いており、小説は少なく、児童書コーナーは一切ない。前述の図書館と異なり、とても静かな空間で読書や学習ができる場であった。また、本が日に当たらない空間作りとなっているので、少し暗い雰囲気であったが、本が日焼けすることはなく、本には優しい図書館であると感じた。

委　員：このような視察は今回が初めてか。

事務局：以前にも２か所視察したことがある。

委　員：一つ目の図書館は、空間が分けられているとのことだが、静かに本を読みたい人には、その空間が保証されていたか。

事務局：この図書館には地下があり、そこには小説やコミック等が置かれ、１階・２階と全く異なる空間で静かに読書ができる環境であった。反対に４階では児童書が中心で、子どもたちが声を出して遊びながら本に触れる空間であった。それぞれの空間が上手く分けられているという印象であった。

委　員：「書店のような図書館」「会話がはずむ」という表現があった。市民アンケート等でそれらを望む声もある。いろいろな声はあるだろうが、自分は静かな空間を求めたいタイプである。会話がはずむ図書館とは、どのようなイメージだったか。規模が大きいからできることのようにも感じる。

事務局：書架付近で話をしている姿を見かけた。本をメインに何かをしているのではなくプライベートな会話が中心のようだった。本関連のイベント時の様子は見られなかったが、本を中心とした会話が繰り広げられるのだと思う。キャップ付きの飲料なら書架に持って行くことも可能。規模については、思ったよりこじんまりしているという印象を受けた。

（３）駅北複合公共施設における瑞浪市民図書館のあり方について

〈事務局より、資料に基づき説明〉

【テーマ】

市民図書館と関係機関の連携のあり方について

【意図】

地域において図書館が果たすべき役割は大きい。図書館が提供できるサービスはたくさんあるが、そのサービスを知らないため活用に至っていないというケースもある。また、人員・設備等の都合上、提供できていないサービスもある。そこで、各関係機関と市民図書館との関わり方の現状と今後について意見交換・共有し、「すぐに実現できそうなこと」と「新図書館の運営に反映したいこと」を色分けしながら、今後の連携のあり方の方向性を探る。

【協議手順】

①グループ協議：学校・地域・事務局の３グループに分かれ、資料３のグループ協議での整理ポイントについて、各委員の意見を共有し、意見交換を行った。

②全体発表：グループ協議の内容を踏まえ、自分の所属・立場における「現状の関わり方」と「今後の関わり方の希望・理想」を各委員が発表した。

【各委員・事務局からの発表】

委　員：パレオパラドキシアの化石が発見されたということで、それを分室に活かしたいと思い、図書館に相談したところ、すぐに化石に関係する本を持って来ていただいた。初心者にとっても読みやすい本がたくさん並び、分室としてこういう連携の仕方があるのだと発見できた。今後も分室に作りたいコーナーや置きたい本があれば、図書館にお願いしていきたい。

委　員：高校では学習指導要領が改定された関係で、探求型の学習を重視するようになってきた。それによりいろいろ調べる機会も増えていくと予想されるが、限られた予算の中で必要な冊数を準備することが難しいため、相互貸借や団体貸出という形で学習に関わっていただけるとありがたい。また、高校生の場合、特に勉強場所として図書館を利用することが多いため、グループでの学習も含め多様な場面を想定し、学習場所の確保をお願いしたい。

委　員：現在、当校では環境やＳＤＧｓをテーマに取り組んでいる。学校にある本以外に図書館の本も活用しながら学校にコーナー本を設置する場合、図書館の本は最長どのくらいの期間貸し出し可能か。

事務局：団体貸出として、貸出期間については学校と協議しながら臨機応変に対応できる。ぜひご相談いただけたらと思う。

委　員：新しい図書館は魅力的であることが大事。学習するために静かな空間を好む人もいれば、仲間と話ができる空間を選ぶ人もいるため、多様な空間が必要ではないかと思う。一時的に足

を運んでいただけたとしても、魅力がなければ継続しない。学校としては、きっかけを与えたり、目的をはっきりさせたりすることはできるが、やはりそれに応えられるだけの魅力が必要。魅力の中身についても考えていかなければならないと思うが、視察で得た情報の中で実際に活用できそうなことを共有していただき、学校と連携しながら検討していけたらと思う。

委　員：幼児園ではＩＣＴ化により保護者連絡はデータで配信することが多い。駅北移転等の市民に伝えたい情報や子どもを対象としたイベント情報についてもＰＤＦデータ等を幼児園に送っていただければ、ＩＣＴを有効的に活用し、保護者への様々な情報発信に協力できる。情報をどのように伝えるかは課題。情報量が多すぎると読んでもらえないかもしれないが、紙で配るよりはデータの方が読んでもらえる可能性が高い。

委　員：移転予定の図書館が今よりもさらに魅力ある利用しやすい施設になるためには、人の存在は欠かせないと思う。働き方改革をする上での事務の機械化・合理化・効率化とともに、対面での丁寧な接客というところから、人との出会いがあるとよいと思う。また、静かな空間、おしゃべりができる空間、親子で気軽に過ごすことができる空間等、様々なニーズ、様々な空間モデルを描いて、限られたスペースにいかに落とし込むかを様々な人の意見を聞きながら検討していただけるといい。

委　員：ある新しい図書館は階数が分かれており自分としては利用しづらかった。眺めたときに広く見渡せる広い空間の方がどこに何があるかわかりやすい。移転予定の図書館ではそのあたりを考慮した空間づくりを行い、利用しやすい施設になるとうれしいと思う。また、年配者と子ども等、地域の人が様々な年齢層の人に出会うことができる施設であるとよい。地域の高校生同士が集まり交流できる場、高校生が企画してまちづくり組織に提案できる場、図書館に集まり図書館から様々な情報を得られる場等、そのような場面がこの施設で繰り広げられることとは地域にとってもいいことである。

委　員：駅南のまちづくりに関しても様々な課題がある。駅北と駅南が相乗効果を生むような形で盛り上げていけたらいいと思う。

事務局：事務局では、図書館が他の機関とどのように連携していきたいかという視点で話し合った。図書館としてはブックトークを全ての小中学校で実施できるとよいと考えている。ただ、図書館側の提供するテーマが学校側のニーズと合致せず、実現しなかったケースもあり、双方の折り合いをどのようにつけるかが今後の課題として見えてきた。そこで、学校の翌年度の方針が決まる前に、校長会等の場において図書館が提供できる内容等を伝える機会を設けることで、つながり方を展開していけるといいという意見が出た。

　幼児園とのつながりについては、リサイクル本の提供ができないかと考えている。廃棄対象となった本や紙芝居は、文化祭等でリサイクル本市として来場者に提供しているが、その前に幼児園へ声をかけて必要な本等を優先的に配布するというつながり方もできると思う。また、学校司書と図書館との間でもっと直接的なつながりを持ち、今後何ができるかという話し合いができるとよいという意見も出た。

事務局：事務局としては、現在の指定管理者のここまでの１５年の歩みをとても尊重しており、作り上げてきた市民図書館の良い点をそのまま引き継いでもらいたいという思いがある。新施設の運営事業者の選定方法は未定だが、図書館の運営だけでなく施設全体の管理運営も含めた公募となる可能性もある。現在、市民図書館の常勤職員７人のうち６人が司書又は司書補の資格を有しており、これだけの有資格者がいることは市民図書館の強みである。「図書館は人が大事」という話も出たが、今後も専門的人材を大事にしながら新しい施設につなげていきたいと考えている。コロナ禍からの回復期ではあるが、個人貸出冊数も徐々に復調し始めており、市民図書館の頑張りが結果として数字に表れているのではないかと考えている。